

HUE-LANDSCAPE

70th anniversary

NO. 31

Autumn/Winter 2019

★釧路キャンパス★

時をさかのぼり
釧路校校舎の正体に迫る！

★函館キャンパス★

北方教育資料館でたどる
函館校歴史の旅

★岩見沢キャンパス★

時代に合わせて変化し続けてきた
我が岩見沢校舎の歴史を探る

★札幌キャンパス★

キャンパス長と地域の方が
振り返る札幌校の平成

★旭川キャンパス★

地域が作った旭川校。
次は私たちが、地域、未来のために。

北海道大ヒストリア

HUE-LANDSCAPEは
学生スタッフが活躍する学園情報誌です！



横山 彩夏
旭川校



朝日 郁絵
旭川校



毛利 羽音
岩見沢校



平山 紗也華
岩見沢校



柴田 好
釧路校



小笠原 紀佳
釧路校



山縣 まる子
札幌校



藤田 あい
札幌校



水口 史菜
函館校



山邊 瑞穂
函館校



洞内 真琴
函館校

編集局のE-mail ▶ landscape@s.hokkyodai.ac.jp

HUE-LANDSCAPE に関するご意見、ご感想をお気軽にお寄せください。
企画案や写真・イラストも、常時募集しています！

本誌は、本学学生である自覚を高め、有意義な学生生活と、将来への明確な目的意識の促進につながる情報を紹介するため、平成17年1月に創刊されました。
今号の発行にあたり、本誌の趣旨にご賛同いただいた企業の皆様からご支援を賜り、誠にありがとうございます。
今後とも本学学生へのご支援、ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

カネシメホールディングスグループ カネシメ 高橋水産株式会社
札幌篠路自動車学校
札幌商工会議所
株式会社 北洋銀行
株式会社 北海道アルバイト情報社
北海道教育大学生協同組合
北海道労働金庫
ヤマチユナイテッド
練成会グループ
(50音順、敬称略)

HUE-LANDSCAPE

Autumn/Winter 2019 No.31

令和元年 10月 発行
発行：国立大学法人 北海道教育大学
編集：北海道教育大学学園情報誌 HUE-LANDSCAPE 編集局
編集局長／宇田川耕一(岩見沢校)
編集局員／今村 彰生(旭川校) 鈴木 哲平(岩見沢校)
土岐 圭佑(釧路校) 幸坂健太郎(札幌校)
長尾 智絵(函館校)
編集協力：株式会社須田製版

本誌バックナンバーは
北海道教育大学ホームページで読むことができます。

HUE-LANDSCAPE



北海道教育大学ホームページ
<https://www.hokkyodai.ac.jp/>



P20「人気講座紹介」より

Contents

- 2 [巻頭特集]
夢に向かって走れ!
希望を胸に日々活動する
教育大生たち(道央篇〈上〉・札幌校)
- 4 [特集]
北教大ヒストリア
- 4 釧路キャンパス/教員養成課程
時をさかのぼり
釧路校校舎の正体に迫る!
- 6 函館キャンパス/国際地域学科
北方教育資料館でたどる
函館校歴史の旅
- 8 岩見沢キャンパス/芸術・スポーツ文化学科
時代に合わせて変化し続けてきた
我が岩見沢校舎の歴史を探る
- 10 札幌キャンパス/教員養成課程
キャンパス長と地域の方が
振り返る札幌校の平成
- 12 旭川キャンパス/教員養成課程
地域が作った旭川校。
次は私たちが、地域、未来のために。
- 14 新入生の抱負 2019
- 16 キャンパス便り(旭川校)
- 17 大学院生の研究紹介(岩見沢校)
- 18 研究ファイル(釧路校)
- 19 国際交流ニュース(函館校)
- 20 人気講座紹介(札幌校)
- 21 新任の先生方
- 22 保健管理センター発
- 23 INFORMATION

HUE-LANDSCAPE とは?

このキャンパスから眺める今現在の風景と、これから創造していく自分と社会の風景という意味をこめてつけました。

●HUEは「Hokkaido University of Education」より

こんにちは。本誌編集局長の宇田川耕一(岩見沢校)です(写真①)。「夢に向かって走れ!」特集の第3弾は、第1弾・道東篇(釧路校)、第2弾・道北篇(旭川校)に続いて「道央篇〈上〉」として札幌校を取り上げます。なお、「道央篇〈下〉」は岩見沢校ですが、次号は第4弾・道南篇(函館校)を予定しているので、もう少しお待ちください。

さて今回は、副編集局長の幸坂先生(札幌校)に、特集のプロデュースをお願いしました。近年、札幌校では若手の先生方がようやく増えてきているとのことで、その先生方のゼミを覗くというコンセプトです。初夏で季節も良く、札幌校の玄関前はまるで絵画のような美しい佇まいです(写真②)。

では、さっそく札幌校で取材開始です。



写真②

最初に向かったのが、生活創造教育専攻・総合技術教育分野の出口哲久先生(専門:栽培・生物育成)の研究室でした。出口先生によると「技術科なので、中学生の生物育成領域が中心です。中学生の技術科になってはじめて、



写真③

生物に主体的に働きかけるようになり、教員にはさまざまな技術も要求されます。そこで、多くの学校で取り入れられている栽培の研究に取り組んでいます」とのこと。

4年生の小川海斗さん、芳賀郁美さん、吉田海成さんに話を聞きました(写真③、右から小川さん、芳賀さん、吉田さん、出口先生)。

芳賀さん「小学生の頃から栽培は身近でしたが、大学の授業で初めて、種から苗を作り畑に植えて収穫するという経験ができたのでとてもうれしかった。その喜びを小学生に伝えていきたい」。小川さん「ジャガイモの研究をしています。民間企業に進みますが、学んだ農業の知識を活かして、将来はそこで商品開発にも取り組んでみたい」。吉田さん「子供たちが自分から栽培したいという気持ちになれるように、学校現場で指導していきたい」と、それぞれ夢を語ってくれました。



写真④



写真①

巻頭特集 夢に向かって走れ!

希望を胸に日々活動する 教育大生たち

道央篇〈上〉
札幌校

ところで、札幌校の敷地内に畑があるのをご存じですか。インタビューの後、出口先生が管理している畑を見せていただきました(写真④)。さまざまな栽培方法を実際に試してみようという教育環境が、しっかりと整っているのに感心しました。

次に、理数教育専攻・理科教育分野の渡辺理文先生(専門:理科授業の分析)の研究室に向かいました。4年生の菊池遼太さん、佐野



写真⑤

綾音さんと渡辺先生に、いろいろお話を聞きました(写真⑤、右から渡辺先生、菊池さん、佐野さん)。

渡辺先生によると「授業自体を研究しているのが、この研究室の一番の特徴です」とのこと。たとえば、佐野さんの場合は「小学校に行き研究しているのですが、この段階では能動的学習者(授業に積極的に関わる子供たち)と受動的学習者(受け身の子供たち)の2パターンがあり、前者が後者にどう働きかけて共に成長していくのか、などがテーマです」。菊池さんは「高校でのICT機器を用いた授業を対象に、その特徴や効果などを教育学的な視点で捉えようとしています」といった具合です。

佐野さんと菊池さんに、将来の夢についても伺いました。佐野さんは「教員になったら、子供たちができるだけ長い時間お互いに交流するような授業をしてみたい」、菊池さんは「人生80年程度しか生きられないと思うので、その中で、できる限りいろいろな未知の経験を重ねていきたい」とのことでした。

理科教育分野という、つい物理学・化学・生物・地学の4領域をイメージしがちですが、意識調査、教材開発、授業分析というのも、大切な柱であると、認識を新たにしました。

最後に、学校教育分野・教育学専攻の山田真由美先生(専門:教育哲学)の研究室を訪ねました。3年生のゼミで、川口莉奈さん、村



写真⑥

松真麻さんのお二人と大学院生1年の川元藍さんが受講していました(写真⑥、右から川口さん、山田先生、川元さん、村松さん)。

この日は、村松さんが要約したテキストのレジュメをもとに、「みんなで読みながら、筆者が何を考えているのかということを理解して、語り合います。そして、我々がこれをどう引き受けるかを考えます。今日は「教育者とはどういう人間なのか」がテーマです」(山田先生)といった授業内容でした。

とりわけ印象に残ったのは、山田先生の「哲学が対象なので、そもそも私がこのゼミで教えることはありません」という言葉でした。「知りたいという思いだけで集まっているゼミです。ゼミ生それぞれが教育や人間について探求することが目的なので、何か問題があれば哲学の専門知識のある私が解説はしますが……」とのこと。

どうやら、道徳教育とどう向き合うか、表層的な理解ではなく、その内側にある本質的な意味を追及するということが主眼になっているのではないかと、語り合うみなさんを見ていて、そう感じました。

帰り際に2階講堂入口で、平成30年の北海道美術協会主催「第93回道展」で最高賞となる北海道美術協会賞を受賞した、花輪大輔先生(札幌校)の受賞作品「意志」を鑑賞しました(写真⑦)。文字通りの大作で、その重厚な質感と存在感に圧倒されました。

ということで、札幌校の取材もあつという間に終了しました。どのキャンパスでも同じですが、ここでも夢を追うたくさんの光が確かに見えた、そんな貴重な体験でした。



写真⑦

北教大 ヒストリア

元号が平成から令和となった今年は、北海道教育大学が北海道学芸大学として開学してからちょうど七十周年を迎える年でもありません。今回は記念すべきこのタイミングに改めて足元を見つめ直し、新たな時代に向けて歩み出すため、それぞれのキャンパスが歴史を振り返る特集です。



1949年に開校した旧校舎の全景

KUSHIRO CAMPUS
釧路キャンパス

時をさかのぼり 釧路校校舎の正体に迫る!

01 釧路校はいつ開校されたの？
釧路校が開校されたのは、一九四九年（昭和二十四年）八月十日です。

02 開校から現在までの建物に関わる主な出来事
一九四九年（昭和二十四年）に開校されてから、校舎と体育館、一九六三年（昭和三十八年）に完成した附属図書館で構成されていました。しかし、一九六五年（昭和四十年）五月二十三日の午前一時二十分頃に、校舎の東部一階から原因不明の火災が発生したことにより、九百八十八坪を焼失してしまうことになりました。そのため、六月に隣接の旧江南高等学校の校舎の一部を借りて授業再開することになったそうです。

03 大学が開校される前には何が建っていたの？
歴史をさかのぼると、釧路校の校舎が建っているこの土地には、戦前から「学校」が建てられていました。ここには、かつて釧路市女子高等小（女子高等科）が建っており、戦前の教育制度は小学校六年間の後に男女別の高等科二年間（現在でいう中学二年生まで）に進学するというケースがあったため、そこには六年制の旧制尋常小学校を卒業した女子学生がより程度の高い教育を受けるために、高等科に通っていました。



1965年の学校火災後の校舎

04 どのような流れで大学が設置されたの？
一九四八年（昭和二十三年）に釧路市長より、教育大学を釧路市に設置するよう、教育関係機関に要望されたのがきっかけです。その候補地に東中学校の校舎が挙げられました。翌年の一九四九年（昭和二十四年）五月に釧路市より、東中学校の校舎の西半分が提供され、主事室

05 最後に
今回の調査を通して、釧路校は病院だった場所を大学として使ったのではなく、もともと中学校だった場所の一部を使って開校していたということが分かりました。また、棟に分かれていたり、一階の購買へ行く廊下が長いなど、病院の構造らしく思えることから「釧路校はかつて病院だった」という話が噂されたと考えられることについては、歴史をたどることで、「学校として建てられていた場所を使った」ということや「校舎の火災などで新しく建てなおした」という事実が分かったことにより、「単純に構造が似ているだけであって本来大学として建てられた」ということが証明されました。

06 レポーターの声
小笠原 紀佳（おがさわら のりか）
釧路校・教員養成課程・地域・環境教育専攻2年
私自身、「釧路校が病院だった」という話を他キャンパスの友人から聞き信じていたので、調査をすることで自分の通う大学の歴史も知れたし、その友人にも「実はあの話違ってたよ」と話せる日が楽しみになりました!!

上 / 1968年に完成した新校舎の全景
下 / 1993年の釧路沖地震後の校舎



現在の校舎

今回の調査を振り返って、釧路校は病院だったと今まで信じていた釧路キャンパス生をはじめ、他キャンパス生がさらに釧路校の歴史に興味を持つたり、また、各キャンパス

北方教育資料館でたどる 函館校歴史の旅

函館校の歴史は、明治時代にさかのぼります。一八七五(明治八年)に「函館小学教科伝習所」として歩みを始めています。その後、いったん廃止されたものの、一九一四(大正三年)に「北海道函館師範学校」として再度設置されることになりました。昭和に入ると、「北海道学芸大学」の五分校のうちの一つである函館分校となり、平成には「分」が取れて「北海道教育大学函館校」となり、今日に至ります(※函館校ホームページより)。そんな函館校の歴史について、国の登録有形文化財になっている「北方教育資料館」からたどっていきます。主に卒業アルバムから、当時の学生の様子や、校舎の変遷などをレポートします。

北方教育資料館はキャンパスの敷地内にあり、建物は大正時代に建てられた校舎の一部を保存したもので、西洋風の特別な雰囲気をもっています(写真①)。中央にある階段を上ると、ギンギシと音がし、時代を感じさせます(写真②)。館内にはたくさんの資料が保管されており、卒業アルバムを

じめ、半世紀以上も前に使用されていた教科書、師範学校時代の制服、函館校の同窓会である夕陽会の方々から寄贈された作品など、さまざまなものが展示されています。それでは早速、卒業アルバムからたどる歴史の旅へと出発していきましょう。



1 北方教育資料館 正面



2 館内中央の階段

01 大正

保存されている中で一番古いアルバムは、一九一八(大正七年)のものでした(写真③)。今から百年以上前の本に触れると思うと、繊細に扱わなくてはと思うと同時に、とてもワクワクします。現代の卒業アルバムの表紙のように、表題があったり、きれいな風景が描かれたりではなく、ただ黒い無地のものでした。中をめくってみると、制服が、ちゃんちゃんこを着た無表情の坊主頭をした学生の個人写真が並んでいます。当時の校舎正面図(写真④)は、西洋風のデザインです。また、正面に門が取り付けられており、現在の開放



3 大正7年の卒業記念アルバム



4 大正時代の校舎

的な入り口とはまた違った雰囲気でした。

03 平成

一九九六(平成八年)のアルバムは、ほぼ現在と同じ形態です。はじめのページのページには学校行事などの写真があり、次に個人写真が並び、さらに通学風景などの様子が写され、それぞれの学生生活がより分かりやすいものとなっています。この時の校舎は、もう現在と同じ状態になっています(写真⑦)。



7 現在と変わらない平成8年の校舎

最新の二〇一八(平成三十)年のアルバムをのぞいてみると、とても個性豊かな内容になっています。個人写真は、撮影場所がゼミ室や校舎外であったり、好きな本や研究に関わる道具を持っていたりと、それまでと比べて、とても自由な形態で撮られています。アルバイト先の集合写真や、飲み会の写真など、先輩方が学生生活を楽しく過ごしてきた様子がうかがえます。

レポーターの私は令和初の卒業生になります。四年間を思い返すと、たくさん勉強して、たくさんの友達に囲まれて楽しく過ごした光景が浮かびます。これから作られる卒業アルバムに写る自分も、歴代の先輩方のように、キラキラした笑顔になってほしいなと思いました。

「北方教育資料館」で函館キャンパスの歴史を感じてください。

02 昭和

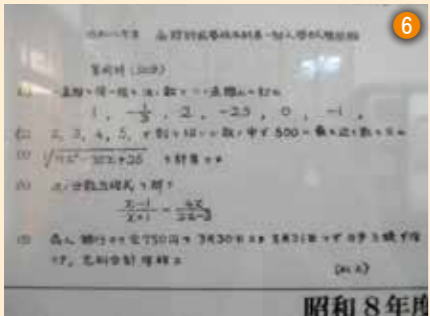
昭和に入って最初のアルバムは一九二七(昭和二年)のものでした(写真⑤)。大正時代のアルバムと同様に、中には、制服が、ちゃんちゃんこを着た坊主頭の学生の個人写真がズラリと並んでいました。数人の顔写真の下には、「死亡」と書かれており、現在残されているアルバムは卒業生からの寄贈となっているため、寄贈者が亡くなった方のお名前を記していたのかなと想像します。この年の校舎正面図は、前出の大正三年と特に変わりありません。

アルバム以外のものについても少し紹介しましょう。写真⑥は一九三三(昭和八)年度の入試問題です。手書きで数学の問題が書かれています。文字や数字は丸みを帯びていてかわいらしい印象です。現代の入試問題と比較してみると、簡単な問題が多く、当時の学習

内容との差を感じます。一九四五(昭和二十)年あたりの卒業アルバムを探してみると、一九四六(昭和二十一年)のものが抜けており、次が一九四七(昭和二十二年)のアルバムになっています。終戦直後であるこの年は、もしかすると学徒動員などで学生たちが駆り出されたり、さらに敗戦を迎えて卒業どころではなかったのかもかもしれません。北方教育資料館には、出征した卒業生や当時の在校生をしのぶ写真や寄せ書きなどの記録も残されています。



5 昭和2年の卒業記念アルバム



6 昭和8年度入試問題

北方教育資料館の中は特別な雰囲気、異世界に来たような気分になりました。昔も今も、卒業アルバムから伝わってくることは、学生生活はやはり人生の夏休みといわれるくらいに楽しいものであるということです。皆さんもぜひ立ち寄ってみてください。

レポーターの声

水口 史菜
(みずぐち ふみな)

函館校・国際地域学科・地域教育専攻4年



岩見沢キャンパスには平成二十六年に第三体育館、平成二十七年には地域文化活動棟という新校舎が建設されました。新校舎があった場所には昔、何があったのか？ 旧木造校舎跡という看板があるがどのような施設であったのか？ といった疑問を調査し、新校舎が建設される以前の様子を知る方のお話も交え、地域文化活動棟と第三体育館の施設の様子など、昔と現在を比較しつつ、施設の歴史の変遷を紐解きました。



I wamizawa CAMPUS 岩見沢 キャンパス

時代に合わせて変化し続けてきた 我が岩見沢校舎の歴史を探る

01 岩見沢校OBの方にインタビュー

昔の北海道教育大学岩見沢校について知りたいということで、本学OBで、現在岩見沢南小学校の校長をされている砂川昌之さんにインタビューを行いました。砂川さんは現在、空知校長会の会長もされています。三階建ての美術・音楽・実験棟が建設されたときに入学し、昭和五十九年に卒業されました。当時、新築されたばかりの建物がとてもきれいだったことが印象に残っているそうです。また、サークル棟として利用されていた木造校舎もあったそうです。

当時の岩見沢校の学生は、半数が教員を志望しており、教員免許を取得しないと卒業できなかったそうです。現在は入学してから将来を考える人も多いでしょうが、当時は教員養成系の大学ということもあり、入学時点で教員になると自覚していた人が多かったそうです。今は、教員養成系の大学から、芸術とスポーツに特化した大学になりました。そのことについては、形を変えてでも岩見沢校として残ってくれたことがうれしくおっしゃっていました。また、専門分野に特化することにより、プロフェッショナルが育成され、その活躍に期待しているそうです。



砂川さんへのインタビューの様子

「にメッセージをお願いしました。」「自分たちの夢を、専門分野を生かして叶え、活躍してほしい。そして、空知に恩返ししてほしい」という言葉をいただきました。 今回のインタビューで、私たちの知らない年代の岩見沢校のお話を聞かせていただきました。砂川さんが在籍していた時期も取り上げながら、昔と今の岩見沢校について比較してみました。

02 創立六十周年当時の校舎の様子

砂川さんが在学されていた当時、岩見沢校は創立六十周年を迎えていたことが分かりました。写真を見てみると、現在の校舎の面影はありつつも、まだ建設されていないものもあります。今回のインタビューに伺う前、岩見沢校の建物について調査をしていたところ、敷地内で旧木造校舎の正面玄関を三すく看板を発見しました。そこで、何か知っていることがあ

ったのではないかと思います。砂川さんに質問してみました。すると、砂川さんが入学された当時、木造校舎が建っていたとの回答をいただきました。 しかし、その時はもうすでに授業では使われていなかったそうです。では、一体どのように使用されていたのでしょうか。砂川さんによると、サークルが活動場所として使っていたようだったとのことでした。それから、この当時は寮も木造でした。現在では新築されており木造ではなくなっています。現在ですべて個室ですが、この時は一部屋三〜四人での生活だったそうです。男子寮には数々の武勇伝があったらしいのですが、それはまた別の機会にぜひお伺いしたいと思います。



旧男子寮は当時木造だった



木造校舎の写真



開校60周年記念当時の航空写真

03 現在の校舎の様子

平成二十六年に第三体育館、平成二十七年に地域文化活動棟が建設されました。第三体育館のアリーナは面積が一六二二平方メートル、天井の高さは二・五メートルあり、各種公式試合に対応したコートサイズを確保しています。二階には、雨天時や冬季におけるトレーニングのための二周、一八〇メートルのランニングトラックを備えています。また、運動分析室、情報分析室、戦略分析室といった運動技術改善に役立つ設備も整っています。

第三体育館は部活動や授業で利用されるのはもちろん、学生主体のスポーツにおける地域貢献活動の一環として行われているバルシューレ、wamizawaバレー塾、wamizawaバスケ塾、さらにスポーツイベントやウイールチェアラグビー日本代表合宿などと、スポーツの多様な場面で利用されている施設となっています。

地域文化活動棟は五つのスペースに分かれています。一階には、映像関連の授業に利用されるシアタールーム、インタビューを実践的に学ぶことができるグループインタビュールーム、授業や自主学習などで利用されるコンピュータールーム、学生の作品や研究などの展示、休憩の場としても利用されるコミュニケーションスペースがあり、二階には、授業や発表などで利用されるアクティブラーニング教室があります。

地域文化活動棟は、それぞれの授業目的や形態に合わせて学ぶことができる環境が整っているため、毎日多くの学生が利用しています。 このように、学科の変遷に合わせて、校舎は形を変えてきました。今も岩見沢校はカリ

キュラム内容をはじめ、進化し続けている点があります。それに伴い、今後も校舎にどんな変化が生まれるのか期待したいところです。

昔の校舎の様子を知る方や現在の校舎を利用している方、両方の視点から面白い比較ができたと思います。現在、第三体育館はさまざまなスポーツ活動に利用されているようなので、注目していきたいです。

レポーターの声
毛利 羽音 (もうり はのん)
岩見沢校・芸術・スポーツ文化学科・
芸術・スポーツビジネス専攻3年

今回のインタビューを通して、昔の校舎の様子を知ることができました。現在も増築が続いている岩見沢校。今後も新しい施設が増えるかもしれないと思うと楽しみです。お忙しい中インタビューに応じてくださった砂川さんに改めてお礼を申し上げます。

レポーターの声
平山 紗也華 (ひらやま さやか)
岩見沢校・芸術・スポーツ文化学科・
芸術・スポーツビジネス専攻2年

北海道教育大学札幌校は一九八七(昭和六十二年)四月、札幌市中央区南二十二条から札幌市北区あいの里へ移転しました。そこから現在まで札幌校はあいの里と共に平成の時代を歩んできました。そこで今回は札幌校に長く勤務されている札幌校キャンパス長の並川寛司先生と、あいの里にお店を構える「手風琴」の吉田裕男さん、吉田玲子さんの三名にお話を聞くことで、学生が知らなかった移転当初のあいの里の様子、札幌校の歴史、あいの里とのつながりを振り返り、これまでの札幌校の変化を知り、札幌校のこれからについても考えようと思います。

※並：並川キャンパス長、裕：吉田裕男さん、玲：吉田玲子さん、藤：インタビュアー



左から並川寛司キャンパス長、吉田玲子さん、吉田裕男さん

Sapporo CAMPUS
札幌キャンパス

キャンパス長と地域の方が振り返る札幌校の平成

01 移転当初の印象

藤 最初にあいの里に移転したときの印象を教えてください。

裕 期待・希望・不安がありました。学園通りを中心としながら学園都市をつくり、やがて教育大学を中心としながらあいの里が充実するのではと期待を持っていました。希望としては当時いろんな街づくりに関わっていたけれど、やがては学生さんたちが溢れる街になり若い力が街づくりに関わって活躍してくれるのではないかと思います。不安は、あいの里は娯楽などに制約があり、みだりに建物を建てられない状態だったので学生さん達が街に来て大丈夫かが心配でした。初めの頃はよく親御さんが学生さんを連れて相談に来ていたので家賃や家の数とかも不安でした。でも期待と



上／学生との思い出を話す吉田裕男さん
下／移転時の印象を話す並川寛司キャンパス長

希望が大きく膨らんでいましたね。

並 僕は大学に赴任して一年旧校舎に居て、移転してくる準備をして翌年こっちに来たのですが、地域の方が期待されているとか何も知らずにどう移転するのかに追われていた。将来のことだとかを考えると余裕は正直ありませんでした。移転前の二月に新しい校舎に大学のバスで来たたら天気が悪くて両側が雪の壁みたいになっていたので、びっくりして学生や自分自身がこれからちゃんと通えるのか心配でした。ただ四月に入ると春ですから交通障害もなく普通に過ごしていましたけれど冬になると心配でした。学校が閉鎖になるような大きなことはなりませんでしたがとても印象的でした。

02 移転当初からの変化

藤 移転当初と現在で何か変化があれば教えてください。

玲 お店では初期の方が学生さんも多くて、大人っぽく振る舞いたい学生さんが入学してはじめて喫茶店に入ってコーヒーを飲むというイメージがありました。最近ではもう喫茶店の文化がわからなくて困って「好きなところに座ってください」と言うって座ってこれるといって感じに変わってきたと思います。でも最近また学生さんが少し増えてきてうれしいです。

裕 学生さんが大人になりましたね。実は僕は退職と同時に、北教大の方で図書館学の非常勤講師を十年くらいやっていました。百五十人くらい受ける子がいて、服装とか学校の先生は教えるだけでなく身をもちやらないければならぬということがあるよとたくさん言いました。そんなことをやっていましたが今の学生さんたちはすごくきちっとしている。そして専門的なことももちろんだけれど自ら学ぶ情報を取り込む、情報をいかしていくことも大切にしています。だから教えていない今は自ら学ぶという大事なところが身に付いているのかなと心配に思います。

講義が終わる時間にほとんどなくなつて、部活動の人が残るくらいになりましたね。前はもう少し研究室で実験や調べ物をしてみんながバイトが一泊で何かするときは一カ月前くらいに言わないと「その日はいけません」と言われてしまうのですよ。きつとみんなある程度生活のために必要ではあるけれど、アルバイトに行くことになって大学に遅くまで自由に残って活動できなくなっていると感じます。

玲 我々が大学生の頃は研究室に主みたい人がいましたよね。そういう雰囲気ではなくなってきましたね。

並 街の様子が変わったというのがありますよね。最初は駅から出た時大学が見えていたら、見えるのになかなか着かないという感じだったし、歩道橋を越えると左側は全部空き地で、移転当時、春先はひばりの声を聞きながら通っていましたね。あと学生さんが今は



札幌校の今後を考える3人

03 これからの期待

藤 最後にこれからの札幌校、学生への期待を教えてください。

玲 私の立場で言えば、あいの里には古いお店は少ないですけど、あることを認知してきてもらいたいのが一番ですね。それといろいろなお祭りの企画においてサークル活動で協力していただけるとうれしいです。

裕 学校の先生になったら授業をどうするとかでなく、まずこの地域に住んでいる子はどういう子なのだろうとか地域を見る目を養わなければならぬと思います。そのために、地域の店とかお祭りとかに足を運んでみてほしいです。そして教育フォーラムなどで学校の姿を地域の人に見せて、先生方だけでなく地域の人と共に子どもを育てるのが大切だと思います。あとはいろんな会があるから学生さんに入ってもらって若い力が活躍してほしい。

並 自分の時間を大切にしてほしいです。限られた四年間でただ大学に来てアルバイトしてということではなく、やっぱり自分で何か取り組みたいものを見つけてそのなかで学ぶことがたくさんあるので、そういうことに目を向けてほしいです。その一つに地域の活動に行ってみるとか、それから、教員ということでも考えると、いろいろな学校とか団体で行っている教育に関わる研究会とかフォーラムとかにも行ったことがないと思うから行ってみたいですね。大学の中にとどまるのではなく、もっと外に行つて実際にいろんなものを見聞きするというのが大事なので、そういう気持ちで積極的に取り組んでほしいです。



「手風琴」との関わりを話す吉田玲子さん

今回、取材をしてあいの里と札幌校のつながりを改めて知ることができ、そして今まで知らなかった札幌校の歴史を知る良い機会となりました。今回のお話を踏まえて札幌校の学生として皆さんがお話してくださったような学生を目指していきたいと感じました。

インタビューアース

藤田 あい(ふじた あい)

札幌校・教員養成課程・言語社会教育専攻 社会科教育分野2年





取材に訪れた、旭川キャンパス近隣のアイヌ記念館。



右/オホツナイ川の痕跡を今に残す昭和池。ここにアイヌの集落があった。
左/かつての自然を偲ばせる、昭和池の畔のエゾミクリ。

asahikawa
CAMPUS
旭川キャンパス

地域が作った旭川校。 次は私たちが、地域、未来のために。

01 札幌、函館…なぜ旭川に学校が?

一八六八年の明治維新以降、開拓使により道東、道北にまで開拓が進み、北海道の人口は増加しました。一九一〇年から、旭川市では各種の中等教育機関の設置について、北海道議会に議案を提出していましたが、なかなか受け入れられませんでした。その折、一九二七年頃より、北海道内では正規の教育を受けた小学校教員が不足し、それが教育の低下を招くと危惧されるに至りました。必要性が認識され、一九二二年十一月に道庁は庁立中等学校新設七カ年計画なる北海道中等教育拡充計

画を打ち出しました。そこには秘密の第三師範学校の設置案もありました。それに際し、旭川区の区長や上川管内の町村長らが、旭川は道東および道北の交通の中心地であり、旭川出身の教員数が多いこと、気候風土が保健に適していること、山川などの教育的環境に恵まれていることを掲げ、設置を要求しました。その結果、ついに道庁は一九二二年に第三師範学校(旭川)と第四師範学校(釧路)の新設を許可しましたが、ある条件が付いていました。

02 地元民の協力が大学をつくった。

旭川市に突きつけられた条件とは、建設費は地元民の寄付金によるというものでした。その予算は三六万九千九百九十二円(現在の約二億円)と莫大でしたが、旭川市民の熱心な支援により、ついに一九二二年九月十二日の文部省北普

九十九号で旭川師範学校の開校が許可され、北海道庁告示七百三十九号
「北海道旭川師範学校を旭川市に、北海道釧路師範学校を釧路市に設置し、大正十二年四月より開校す」が発せられました。

03 犠牲を強いられたアイヌの悲しい歴史。

川の多い旭川。川の合流地点が多くあり、上り下りの河川交通として近隣アイヌとの交流の場であった旭川にはもともと多くのアイヌ(ヘニウシクル)の人々が暮らしていました。しかし、一八六九年に蝦夷地が北海道と改まったから、旭川のアイヌの混乱が始まりました。特に一八七二年の北海道土地売貸規則によって、北海道の土地の所有権を認められるのは

「和人」のみとなりました。一九〇二年の第七師団旭川設置に伴い、訓練場の西側の土地「近文(チカフミ)」(現在の北海道教育大学旭川校付近)に住んでいたアイヌの人々は天塩川上流へと強制移住させられました。そんな悲しい過去がある旭川の地に一九二三年四月、官立北海道旭川師範学校として私たちの学校は誕生したのです。

04 戦禍を越えて、官立北海道第三師範学校

一九四三年三月六日の勅令第二〇九号により師範教育令が改正され、札幌、函館、旭川の三師範学校は、それぞれ第一、二、三師範学校として専門学校程度に昇格しました。しかし、教員育成のために開校されたはずの師範学校は、戦火のなかでその本質を見失っていききました。戦争のなかで教育内容と施設の充

実が図れないまま、教育をしなければなりません。そして戦争が進むにつれ、国家主義的、全体主義的教育がなされるなか、本来の「教員を育てる」という目的は見失われてしまい、一九五一年、北海道第三師範学校は名実ともに廃止されました。

教員になったOBから見ると、現在の旭川校生

旭川校生への願い

一九六八年に旭川校を卒業され、現在は非常勤講師として活躍されている加藤雅之先生が語った、当時の旭川校の様子についてまとめました。

今の学生さんには、社会経験をもっと積んでほしいです。自然な関わりの中で人と付き合う経験を積んでほしい。というのは対機械ではなく、対人間との付き合いを学んでほしいです。あとは教師の品格を持って生徒に接してほしいですね。例えば、言葉遣い一つでも生徒に移ってしまいます。生徒に正しい言葉遣いをしてほしいので、教師自身がしっかり語尾を整えて話してあげてください。それも教育の一環です。そして、想像力をもっと働かせてほしいです。今はインターネットに指導案の例などがたくさん載っていますが、自分で考えて、生み出す、そういった力を付けてほしいです。あと、笑顔です。教師が笑顔だと生徒も笑顔になりますから。

05 平和を願う次の世代へ、北海道学芸大学旭川分校

一九四九年五月三十一日の国立大学設置法により一都道府県国立大学設置の方針が確立されました。平和的民主的國家社会の形成に寄与することを目的として札幌、函館、岩見沢、旭川、釧路の五分校と本部をもって

北海道学芸大学が設置されました。そして、一九六六年に北海道教育大学旭川分校となり、一九九三年に現在の北海道教育大学旭川校ができました。

06 新時代への再スタート、しかし、校舎が足りない!!

戦後、教育に力を入れようというなか、旭川校を襲ったのは深刻な教員不足と建物不足でした。

都道府県に設立された各新制大学が、こぞって人員配置の充実を図った時期であり、教員の確保は特に難しかったそうです。

そして、学舎の確保も困難を極めました。北門町地域(現在の旭川キャンパス)だけでは大学教育に対応できず、春光町(現在の附属小学校校付近)にあった師範学校女子部の校舎を利用し、人文科学、社会科学、教育科学、美術、家庭科の教育が行われました。学生は日々片道二十分の校舎の往復をしなければなりません。特に冬は大変だったそうです。

07 昔は学生として、現在は先生として、卒業生が語る旭川校

講師をしていて、学生さんが真面目で、教師になりたいと強く思っている学生さんが多いと感じます。私たちの頃は「でもか先生」というような、教員にでもなるかという学生さんが多かったんです。代返もあつたし、授業の終わりに教室に入っていく受講票をもらったりもしていました。あとは裕福な学生さんが増えたように感じます。ほとんどが旭川や旭川近辺から来ていて、道外から旭川校に来ていた人はほとんどいませんでした。私たちはみんな今ほど裕福ではなかったんです。寮に四、五人集まって麻雀をしたりしていました。だから昔の学生は絆が深かったと思います。あとは、スーツなんて持っていなかったから学生服で実習に行っていました。

引用文献
[1] 北海道学芸大学旭川分校四十年史刊行委員会(1964)「北海道学芸大学旭川分校四十年史」pp.3-48
[2] 榎森進(2008)「アイヌ民族の歴史」pp.481-484
[3] 北海道教育大学50周年記念誌編集委員会(1999)「北海道教育大学50年史」p.104

レポーターの声

朝日 郁絵
(あさひ いくえ)

旭川校・教員養成課程
英語教育専攻3年

旭川校には自分の知らない歴史があって調べてとても楽しかったです。そして先生の学生への言葉「対人間との付き合いを学んでほしい」という言葉が印象に残っていて、教師になる人ならない人を問わず、これから生きる人にとって大切な言葉だと思いました。





岩見沢校・芸術・スポーツ文化学科・
芸術・スポーツビジネス専攻1年
黒川 雄星(くろかわ ゆうせい)さん
岩見沢
キャンパス

僕は将来、球団マネジメントといった野球に関わる仕事をしたいとの思いから、スポーツビジネスの勉強ができる岩見沢校への進学を決めました。入学後は自分の武器であり、今まで続けてきた落語を学内外に広げるため、芸能サークルを立ち上げました。個性を生かして、さまざまな活動に取り組んでいきたいと思っています。



今後、市内を中心に落語を披露していく予定です!



持ち前の笑顔で教壇に立ちます。

旭川校・教員養成課程・教育発達専攻1年
清水 友捺(しみず ともな)さん
旭川
キャンパス

私は出身地である北海道で小学校の特別支援学級の教員になることを目指しています。大学進学を考えた時、旭川校は小学校教育と特別支援教育のどちらも深く学べ、一種免許が取得できると知ったので、名古屋の高校から進学を決めました。大学生活では、教育実習Iだけでなく、特別支援教育実習も見据えて学びたいと思っています。サークル活動を通して支援を必要とする人々と関わる経験を多く積み、支援学級と通常学級という垣根を越えて児童たちのかけ橋になることが目標です。



初めて、YOSAKOIソーラン祭りに出場しました!



札幌校・教員養成課程・言語・社会教育専攻・社会科教育分野1年
佐々木 優(ささき ゆう)さん
札幌
キャンパス

大学に入学して、今までにないたくさんのチャンスを目の前にし、より一層重要になるのは「自分の意志」であると強く感じています。チャンスは自分から掴もうとしなければやってきません。チャンスを掴めるかは自分次第です。まずは、いつかやって良かったと思えることを信じてさまざまなことに挑戦し続けたいと思います。



新入生の抱負

From freshman

2019

今年の4月に入学した新入生は、どんな思いを胸に未来を見据えているのでしょうか? 希望と熱意にあふれる皆さんに、その抱負を一言で表現してもらいました!



函館校・国際地域学科・地域協働専攻・国際協働グループ1年
遊佐 竜也(ゆさ たつや)さん
函館
キャンパス

入学当初は知り合いがおらず、独りからのスタートでしたが、今ではとても素晴らしい仲間たちに恵まれています。きっかけは、隣り合わせた相手と親しくなったことです。まだ始まったばかりの大学生活、さらなる刺激を求め、隣人のそのまた隣人と輪を広げ、いつかこれを読んでいるあなたとも親しくなれたらうれしいです。

大学でも野球を続けています。今は4番を務め、チームメイトと一緒に頑張っています。



時間を大切に日々練習しています!



釧路校・教員養成課程・地域学校教育実践専攻1年
犬養 竣(いぬかい しゅん)さん
釧路
キャンパス



釧路校に入学し、多くの仲間たちに支えられて、とても充実した毎日をご過ごしています。勉強に部活動、研究室活動やボランティアなど、やるべきこともやりたいこともたくさんあるので、時間を無駄にせず、理想の教師像を目指して日々努力し、精進していきたいです。

発達障害のある方々の余暇支援を目的とした旭川校のサークル「らぼらぼ」。さまざまな活動を運営されていますが、実際にはどのような流れで行われているのか、発達障害の特徴にも触れながら紹介していきます。



ボランティアサークル「らぼらぼ」の活動から学ぶ特別支援教育とは



みんなで旭岳登山に挑戦してきました。

発達障害には大きく分けて、自閉症スペクトラム障害、注意欠陥多動性障害、学習障害の3タイプがあります。しかし、診断名が同じであっても一人一人症状や特徴は異なります。らぼらぼの参加者は、この3つのうちの「自閉症スペクトラム障害(以下、自閉症)」のある方です。その皆さんの休日(余暇)を楽しく過ごしてもらおうための支援を行うことを目的とした「らぼらぼ」の活動です。

具体的にはどのような活動を行っているのか、どのような魅力があるのか、サークル代表の教育発達専攻3年生 山下日菜子さんにお話を伺いました。

— まずは参加者の皆さんが抱えているという「自閉症」の特徴を教えてください。

山下 自閉症の方の主な特徴としては、特定の動きや感覚にこだわりが強いこと、人とのコミュニケーションが苦手であることなどがあげられます。しかし、特性は人によってかなりさまざまです。

— 余暇支援をすることが目的というのですが、休日を楽しく過ごすためになぜ支援が必要なのですか？

山下 先ほどあげた自閉症の特徴のなかに「コミュニケーションが苦手」とありましたよね。よって休日に友達と遊ぶことも簡単にはいかないため、どうしても一人で過ごしてしまいがちです。そこで充実した休日を過ごすためのお手伝いをします。

— 休日に多くの人と過ごすことでコミュニケーションを取る機会も増えるという面でも参加者さんにとって大切な活動かもしれないですね。では、主にどのような活動を行うのですか？

山下 まずはボランティア自身も楽しいと思う活動を行うことを大切にしています。さまざまな種類の活動があり、調理活動や運動登山やキャンプ

— 普段行うのが難しい、野外活動も体験できるというのは非常に魅力的ですね。活動はどのような流れで行うのですか？

山下 活動内容をその回のリーダーが筆頭に決め、道具の準備や教授・参加学生を集めた会議を行い、当日の活動を運営します。また、活動後には参加者さんの活動時の様子を保護者に直接伝え、全体で反省を行います。

— なるほど、保護者との関わりもあるんですね。

山下 はい。もともと、らぼらぼの活動はすべて「どんまいの会」「自閉症児者親の会」という、保護者の方々が運営している



毎年4月2日の自閉症啓発デーに、旭川のCoCoDeiにて点灯式を行っています。あたり一面が自閉症のシンボルである青色に染まります。



季節に合わせて活動も大事にしています。雪にカラフルな色をつけて遊びました！

る組織のもとで行われています。そのため活動の企画・活動場所の準備・活動後の反省等、常に連絡を取り合っています。

— 将来教師になる私たちに、保護者の方と関わる経験を積むということはどうも貴重な機会ですね。

山下 参加者さんのことを一番よく知る保護者の方と連携して活動できるため、参加者さんほどのような活動を求めているのか、またどのような点に注意するべきか、学生側が全員しっかりと把握したうえで接することができそうです。

— では活動を行うなかで大変なことはありませんか？

山下 参加者さんの特徴がそれぞれであることや年齢層が幅広いことから、毎月どのような活動を行うかについてとても慎重に考えなければならぬことです。準備不足だとトラブルも起こってしまいます。それを事前に防ぐためにも、活動場所の下見や当日の流れは会議で念入りに確認します。

— 一回一回の活動に多くの時間を費やして準備をしているのですね。では最後に、活動中に障害のある方々と向き合ううえで大切にしていることを教えてください。

山下 まずは、参加者さんの「休日」であるということをお

れずに楽しく過ごしてもらおうように心がけること、そして「障害がある」ということを意識しすぎないということ。意識しすぎないというのは具体的に言うところ、

山下 障害の有無に関わらず、誰にでも得意不得意があるのは当然です。参加者さんにはできないことがある分、参加者さんにしかできないこともたくさんあります。なので、「支援する」という意識を持たずにあくまでも「一緒に経験する」という意識のもとで行っています。

— どのような人と関わるうえでも大切なことですね。学生側がそのような意識を持つて臨むことで初めて参加者さんも楽しい休日を送れるのでしょうか。

教師を目指している、とくに教育発達専攻の私たちにとって特別支援教育の知識は必要不可欠です。すべての学生が講義を受けています。しかし、知識だけでなく、実際に関わるといって非常に重要だということを感じました。この記事を通して、少しでも多くの学生が特別支援教育への関心を持ってくださることを願います。



レポーターの声
横山 彩夏(よこやま さやか)
旭川校・教員養成課程・教育発達専攻3年

現在もハンドボール部で活動しつつ、卒論で取り組んだ「日本ハンドボールリーグにおけるファンの実態」についての研究をさらに深めている大学院生の南部晃さん。その研究方法や「自身の将来などについてお聞きしました。

— 大学院に進学しようと思ったきっかけは何ですか？

卒業論文で「日本ハンドボールリーグにおけるファンの実態」をテーマにして、ハンドボールの日本トップリーグにおけるファンに対して観戦者調査を行い、ファンの実態の基礎的な資料を集めたので、集めた資料を基にもう少し深掘りしたいと考え、大学院に進学しようと思いました。

— どのような研究をされているのですか？

修士論文に向けて、卒業論文で取り組んだことを継続、発展させる研究をしています。「日本ハンドボールリーグにおけるファンの実態」をテーマにして調査した結果、男性より女性の方の観戦者が多いということが分かりました。女性ファンが多く、好きな選手やチームを応援したいという理由が多いのが特徴であること、また、ハンドボールをやっていない人が多く観戦しているというのも特徴であるということが分かりました。新規のファン獲得のヒントが女性ファンにあると思うので、女性ファンに焦点を当てて、観戦動機・魅力・不満などを観戦者調査で聞き、修士論文につなげられたらと思います。

— 観戦者調査とはどのような調査であるか教えてください。

観戦者調査とは、実際に日本ハンドボールリーグの試合会場に行き、観戦者一人一人にアンケートを取ります。具体的には、年齢・

大学院生 研究紹介

岩見沢校・芸術・スポーツ文化学科・
芸術・スポーツビジネス専攻卒業
北海道教育大学大学院教育学研究科・
教科教育専攻・保健体育専修1年

話 = 南部 晃(なんぶ ひかる)さん

ハンドボールファンの実態を紐解く



本を読んで勉強する様子

性別・在住などの観戦者プロフィールや観戦動機・魅力・不満などをアンケートし、回収して、分析します。

— なぜその研究に興味を持たれたのですか？

自分自身は大学からハンドボールを始めたのですが、日本でハンドボールは観戦において、するにおいても、野球やサッカーに比べたらマイナースポーツであると考えています。どのようにすればハンドボールも含めたマイナースポーツが普及して、人気になるのか方法を見つけないかと思ったのがきっかけです。

— 研究の着地点を教えてください。

観戦者調査をする上でより多くの良いデータを集めるために、質問内容や分析方法をしっかりと固め、男女共に観戦者が現在どのような観戦動機・魅力・不満などを持って観戦しているのかを明らかにして、日本ハンドボールリーグやチーム運営に使えるような分析、観戦者を増やす策を提案できたらと思います。

— 今後の進路・将来について教えてください。

現在、北海道には日本ハンドボールリーグに所属しているチームがないので、北海道コンサドーレ札幌にハンドボールチームを設立するのが夢であり、そういったスポーツチームやスポーツクラブで大学生時代に研究してきたことを活かしていきたいです。



ハンドボール部で活動する様子

ハンドボールの競技そのものではなく「ファンの実態」に着眼点を置いた調査や分析のお話は新鮮で、ハンドボールをしている私にとって非常に興味深い内容でした。残りの大学生活で、自分の好きなことや研究を深めていこうという気持ちを大切にしていきたいと思いました。

インタビューの声



毛利 羽音(もうり はのん)
岩見沢校・芸術・スポーツ文化学科・
芸術・スポーツビジネス専攻3年

国際交流ニュース



東ティモール派遣記

2019年2月19日～2月27日にJENESYSというプログラムから、函館校を含む日本の3つの大学より各6人が東ティモールへ派遣されました。聞き慣れないプログラム名に、行ったことがある人は少ないであろう国。今回は、函館校から派遣された6人のうち澤口心さんにお話を聞きました。

期間 2019年2月19日～2019年2月27日

澤口心(さわぐち ことろ)さん 函館校・国際地域学科・地域協働専攻・国際協働グループ2年

JENESYS(ジェネシス)というプログラムを利用して東ティモールに行かれたそうですが、JENESYSとは何でしょうか?

日本の外務省が推進する「対日理解促進交流プログラム」のことで、将来を担う人材を日本に招聘したり、また日本から派遣したりして日本の魅力を積極的に発信することで、対日理解を促進する目的で行われています。このプログラムの対象国は東ティモールを含むアジア大洋州地域の他に、北米や中南米地域などもあります。今回の東ティモールへは、日本の3大学から審査を通過した各6人が派遣され、9日間行動を共にしました。外務省管轄のプログラムのため、渡航費や滞在費などは一切かからずに行くことができました。

印象的だった現地での出来事がありますか?

現地の人がかたく優しく人懐

こいことです。現地に到着すると、たくさんの方が温かく迎えてくれたり、滞在したホテルの方が毎朝「ボンディア(おはよう)」とあいさつしてくれたりしました。あいさつは町を歩いていても交わされました。また、派遣中に現地の学校を何度か訪問して、授業を観察したり、プレゼンをしたりしたのですが、毎回現地のダンスで歓迎してくれました。この温かさに慣れてしまっていたため、派遣期間が終了して東京で解散した時は、あいさつもせずに通り過ぎていく周りの人々のことを冷たく感じてしまいました。(笑)

頭がパンクしそうになるほど多くのことを学んだのですが、特に強く印象に残っていることは、東ティモールはインフラが整っていないため、勉強したいのにできないという現状についてでした。授業をして

いてもプレーカーが途中で落ちてしまうため、授業を円滑に進めることができません。整った学習環境がみんなに与えられている日本では、やる気がなくても学ぶことはできます。一方東ティモールでは、学習できる環境にある一部の子どもたちみんなが一生懸命勉強に取り組んでいます。そのため帰国してからは、私も勉強を頑張ろうと思うようになりました。

東ティモールに行った感想を聞かせてください。

帰国後、東ティモールであったことを友人に話すと、みんなが「東ティモールに行ってみよう」と言ってくることがとてもうれしいです。私自身、海外に行くことが初めてだったため、派遣前はとても不安でしたが、経由地のインドネシアに到着した時には「帰りたい」とホテルの同室の仲間に話していました。しかし、ホ

どこまでも深く掘り下げられるような、面白いお話がたくさん聞けたインタビューでした。インタビュー終了後も「まだまだ話せる」と言って、私の小さな質問にも快く答えていただき、本当に多くのことを知ることができました。ありがとうございました。

インタビューの声

洞内 真琴 (ほらない まこと)

函館校・国際地域学科・地域協働専攻・国際協働グループ2年



テルのレストランでジュースを頼んだとき、ジュースを作っていた方に話しかけてみるとフレンドリーに対応してくれて、サービスまでしてくれました。これをきっかけに海外に対する怖いイメージが払拭され、楽しく過ごすことができました。初めての海外はとてもいい思い出に恵まれたので、これからも、海外に行く授業に参加したり留学や旅行をしたりしてみたいと思っています。



パソコンを見せながらインタビューを受ける心さんと、学生スタッフ



訪問先の学校でのダンスによる歓迎



「タイス」という東ティモールの伝統織物のマーケット



日本とは異なる現地の食べ物



人懐こい生徒たち



一年中夏の東ティモールのビーチ



ホームビジット(訪問先の生徒の家庭にお邪魔する)先の家族と



訪問先の学校の生徒たちと



海外の印象を変えてくれたホテルの人



太鼓で現地の人々と交流

研究ファイル

大規模震災から考える、ストレスとコミュニケーションの関係

もはや他人事とは言えなくなってきている大規模災害。災害を乗り越えるとき誰を、どんな側面からフォローする必要があるのか。主に、臨床心理学を研究している浅井先生から大規模災害時のストレス反応についてのお話を伺いました。

釧路校・教員養成課程・地域学校教育実践専攻

浅井 継悟 (あさい けいご) 先生 釧路校准教授



PROFILE

1986年生まれ。旭川市出身。東北大学大学院教育学研究科修了。本学(旭川校)の卒業生でもある。専門分野は臨床心理学、教育心理学。システム論、コミュニケーション論に基づいた家族療法、プリーセラピーなどに関する研究を行っている。また、過剰適応や大規模災害時のストレス反応についての研究も行っている。

大学の教員を目指すきっかけはなんですか? 私はもともと小学校の教員を目指しており、旭川校の教育心理学のゼミの学生でした。旭川校の久能弘道先生の授業でプリーセラピーに出会い、もともと学びたいと思ったのがきっかけです。もともとは教員を目指していたので、大学時代は皆さんと同じように教育実習にも行きましたし、研究授業もしましたし、卒業してからも非常勤ですが小学校教諭としても働いていました。

プリーセラピーを詳しく教えてください。プリーセラピーとは、問題の原因を掘り下げるのではなく、解決に焦点をあてる心理療法です。私はこのプリーセラピーの考え方に強く惹かれると同時に学校現場のさまざまな場面で応用できるのではないかと考えています。

先生は専門分野を教えてください。専門分野は臨床心理学ですが、研究内容は多岐にわたっています。心理療法の一つである家族療法、プリーセラピーの学校現場での応用や、自分を抑えて無理を押しつける人の特性、状態である過剰反応についての研究、大規模災害時のストレスについての研究などをしています。

四月にプリーセラピーを教えるために私たちに話してくださいました。四月にプリーセラピーを教えるために私たちに話してくださいました。

先生は専門分野を教えてください。専門分野は臨床心理学ですが、研究内容は多岐にわたっています。心理療法の一つである家族療法、プリーセラピーの学校現場での応用や、自分を抑えて無理を押しつける人の特性、状態である過剰反応についての研究、大規模災害時のストレスについての研究などをしています。

プリーセラピーを詳しく教えてください。プリーセラピーとは、問題の原因を掘り下げるのではなく、解決に焦点をあてる心理療法です。私はこのプリーセラピーの考え方に強く惹かれると同時に学校現場のさまざまな場面で応用できるのではないかと考えています。

行政職員を対象にした点というの、大規模な災害が起きた際、公務員は自身も被災しているのにも関わらず住民のために昼夜を問わず懸命に働かれます。一方、すべての住民がそうとは言えませんが、災害によって生じた行政的な、不備・不満を職員にぶつけられます。これも住民の気持ちを考えてやむを得ない部分もあると思います。さらに、新聞などのメディアもこそって行政の不手際を指摘します。災害による激務に加え、周囲の環境がこれでは行政職員の方は体調を崩してしまいます。そういった状況に焦点を当てる必要がありました。

また、これらの研究は、行政職員を対象にしましたが、得られた知見は、公立学校の先生にも多くの部分で当てはまると思います。東日本大震災の際には、多くの学校が避難場所となり、初期の避難所の対応・運営は学校の先生方が

動という点については、離れた地域で報道等を目にする人の中には、被災地にいる人がみんなPTSD(心的外傷後ストレス障害)のようなひどい状況がずっと続くようにイメージされる方もいらっしゃるようです。もちろん深刻な方はいらっしゃると思いますが、現在もそのような症状で苦しんでいる方もいらっしゃると思います。ですが、被災したすべての人が必ずPTSDになるわけではないと思います。この研究では、ストレスは時間とともに経過すること、日頃の職場でのコミュニケーションがストレスを低下させることを明らかにしました。この研究結果を応用するならば、多くの場合、今大変な状況でも、ストレスは時間と共に緩和されるという見通しを持つことを伝えるだけでなく、日頃から職場でコミュニケーションを取ろうと心がけるだけで、災害後のストレスを緩和させることを示すことができたと考えます。このように、大変な状況だけでなく少しでも落ち着いている状況に目を向けるのはプリーセラピーの考え方が反映されていると思っています。

柴田 好(しばた のこみ) 釧路校・教員養成課程・地域学校教育専攻2年



Hello! 新任の先生方

平成31年4月以降に教育大にいらっしゃった先生方に、下記の項目にお答えいただきました！

- 1出身地 2出身大学・学部 3前職 4学生のときにしておくと思いとすること 5教育大生の印象または赴任したキャンパスの印象

読者のほとんどが大学院生ではないので、2ではあえて出身学部を伺っています。

松本 哲人 (まつもと あきひと) 先生
札幌校・准教授
言語・社会教育専攻 [経済学]

1奈良県桜井市 2関西大学経済学部 3徳島県の私立大学に5年間勤務していました。4友達をたくさんつくることと卒業後も何でも相談できる教員を最低1人見つけておきましょう。5皆さんが自分の大学生時代よりも賢くてきちんとしているので恐縮することばかりですが仲良くしてください。

佐藤 正直 (さとう まさなお) 先生
札幌校・講師
生活創造教育専攻 [技術科教育学]

1長野県生まれ東京育ち 2工学院大学工学部機械工学科 3東京にて私立工業高校に勤務後公立中学校で技術科の教員をしていました。4よく学ぶ、健全な遊びをたくさんする、良い友達や先輩後輩との交流を深める。5素朴で真面目な学生が多いです。北海道だけではなく広く世界にも目を向けてもらいたいと感じました。

林崎 俊一 (はやしざき しゅんいち) 先生
旭川校・学校臨床教授
学校臨床研究

1北海道上川郡下川町 2北海道教育大学旭川校小学校国語科教員養成課程 3上川郡和寒町立和寒小学校教頭 4アルバイトでさまざまな職種を体験しておくとうと思います。特に接客業は役に立ったなあ。5素直で努力する学生が多いと感じました。先の見通しの立たない世の中ですが、柔軟に対応できる力量を身に付け、経験を積んでください。私も皆さんの一助となれるよう精進いたします。

糊澤 実 (くるみさわみのる) 先生
釧路校・准教授
地域学校教育実践専攻 [学級経営、学校経営、道德教育]

1十勝 2北海道教育大学教育学部釧路分校 3帯広市立緑丘小学校長 4さまざまな分野の本を読み、多くの人と関わり、視野を広めること。5キャンパスは温かい雰囲気、学生との距離も近く感じます。変わることを恐れず、さまざまなことに挑戦してほしい。

小林 淳一 (こばやしじゅんいち) 先生
釧路校・准教授
地域学校教育実践専攻 [教員養成、学校教育]

1群馬県前橋市で生まれ育ちました。2群馬大学教育学部 3北陸地方にある大学です。4一生付き合える学友や恩師にめぐり合ってください。5他人を思いやれる学生が多く、地域と大学の心の距離が近いと感じています。

南 翔一郎 (みなみ しょういちろう) 先生
釧路校・講師
地域学校教育実践専攻 [倫理学]

1大阪府 2京都教育大学教育学部 3立命館大学などで非常勤講師 4読書！ 本の内容を吸収するためというよりは、読解力を高めるために。そうすれば、忙しくなっても空き時間にざっと本を読んで理解し、教養を高めることができます。5素直な学生ばかりです。ただ、もう少し批判的に物事をとらえたり、考えたりしてもいいんじゃないかな？

有井 晴香 (ありいはるか) 先生
函館校・講師
地域協働専攻 [国際社会学]

1神奈川県横浜市 2京都大学教育学部 3京都大学の研究員+京都教育大学等の非常勤講師 4留学 5素直で真面目そうな印象を受ける学生さんが多いです。

小倉 晃布 (おぐら あきのぶ) 先生
岩見沢校・講師
スポーツ文化専攻 [スポーツ運動学]

1大阪府箕面市 2大阪教育大学教育学部 3IPU・環太平洋大学(岡山県)次世代教育学部 4部活動やスポーツ活動をしている人は、その種目やスポーツから人生に役立つ「何を」学べているかを考えておくことが大事だと思います。5授業やレポート課題などに真面目に取り組んでいる印象を受けます。さすが国立大学の学生！ という感じです(^)

鈴木 哲平 (すずき てつぺい) 先生
岩見沢校・講師
芸術・スポーツビジネス専攻 [イベントマネジメント、医療情報学、医療経営学]

1札幌市生まれで江別市育ち 2北海道大学医学部保健学科放射線技術科学専攻(放射線技師の免許を持っています) 3民間医療機関で経営企画→北海道大学大学院保健科学研究院(特任助教)で研究者 4異なる専門分野の人たちと仲良くなること 5前職の大学と比較して…ジャージ&スウェット率が高い！あと、明るく元気な学生が多い印象です。

小沼 豊 (こぬま ゆたか) 先生
教職大学院(札幌校)・准教授
高度教職実践専攻 [学校心理学、教育心理学]

1千葉県 2獨協大学法学部 3東京都にある4年制大学に勤めていました。4学生時代に一度は海外(バック旅行ではなく)に行くといいと思います。大使館にビザを取得しに行き、誰も知らない国で問題を解決する経験は何事にも代えがたいものになります。5図書館や学食などで課題に向かっている姿や、学び助け合っている姿は素晴らしいと思っています。

Popular 人気講座紹介 Lecture

POINT 「楽しかった！」 そんな図工を目指して

専攻問わず多くの学生が参加している講義。実際に作品づくりに取り組む場面が多く、学生から人気が高い「初等図画工作」、どのような講義なのかのぞいてきました。



講義で熱弁する佐藤昌彦先生

札幌校 [前期]

「初等図画工作」

札幌校・図画工作・美術教育分野
担当 花輪 大輔 (はなわ だいすけ) 先生 ※その他に、佐藤昌彦先生、李知恩先生のお二人も担当されています。



PROFILE
 北海道教育大学大学院教育学研究科修士課程修了。2006年より本学附属釧路中学校教諭、2012年より札幌校着任。日本実践美術教育学会理事などを務めている。

今回、担当の花輪先生にお話をうかがいました。一講義内容を教えてください。

基本的には、図画工作という教科の内容を知ってもらうための講義です。表現及び鑑賞の活動が中心の教科なので実技を伴ったり教材の試作をしたりという活動が多くなると思います。一講義で重要視している題材は？

いわゆる造形遊びというのは、日本独特の図画工作の表現領域の中の分野なので、作品をつくることを目的とするのではなく、材料と関わりながら造形的な見方考え方を動かしたり、感性を働かせたりしながら取り組める題材です。例えば画用紙の上でビー玉を転がし、ビー玉の軌跡をつけるものや、2万個の紙コップを材料として捉え、重ねたり、つんだり、並べたりといった行為性に働きかけている造形行為そのものを目的としている活動を重要視しています。これは上手な絵が描けることよりも今学校現場では求められていると思います。また、そのよう

徐々にクレヨンや色画用紙にさわったり、友達と会話をしたりしながらとても楽しかったです。できあがった作品は学生それぞれの個性が出ており見ていてウキウキしました。将来、こんな気持ちを子どもたちと一緒に感じることができたら素敵だなと思いました。

インタビューの声
山縣 まる子 (やまがたまるこ)
 札幌校・教員養成課程・芸術体育教育専攻・図画工作・美術教育分野2年

この授業を受けてみた感想を教えてください

講義を受講する前まで図画工作は作品をつくる単純な授業だと思っていたのですが、教員として子どもたちの自由な発想を妨げないような工夫すること、作品を鑑賞する際の指導の仕方など、奥が深いことを知りました。子どもたちが自分を自由に表現することの大切さを、実践を通して学ぶことのできる講義でした。(理数教育専攻・理科教育分野・宮本 大輝)

な題材は、子どもが“いいこと”を思いついて笑顔になる場面に直接立ち会っていけるので、私が図画工作の授業をやっている、造形遊びが好きだと思える大きな理由の一つです。一学生に身に付けてほしいことは？

表現及び鑑賞の活動が中心なので、実際に活動を通して知り、図画工作を子どもに絵や作品をつくらせるための授業だと捉えるのではなく、そこから子どもがどのようなことを学ぶのかということを考えてほしいです。さまざまな教科には、それぞれ活動を通して学びというのが必ずあり、それが子どもの未来をつくっていくということを、図画工作の窓から見てもらいたいと思っています。一図画工作の授業をするとき、学生に大切にしてほしいことは？

一番大切にしてほしいことは、子どもたちが、先生の図画工作の授業を受けて楽しかったとか、面白かった、先生に会えてよかったと思う、心に残るような図画工作の授業を考えるということです。失敗をしても何度も試したり、時間を忘れて夢中になって取り組んだりという経験を子どもたちにたくさん積み重ねてほしいです。



作品づくりに取り組む学生



INFORMATION



Facebookでつながろう



北海道教育大学公式フェイスブックページは、ホームページでは伝えきれない学生の活動や大学の情報をリアルタイムでお知らせし、大学の皆さんとのつながりをつくるコミュニケーションの場です。



たくさんの「いいね!」をお待ちしております!

f 北海道教育大学公式フェイスブックページ
www.facebook.com/hokkyodai
 アカウント登録がなくても見るができます。

二次元バーコードから簡単アクセス!

広報学生サポーター募集中 大学の広報活動に興味はありますか?

- 大学のイベントやゼミ活動、実習、サークルなど、自分が体験している身近な学生生活を発信してみたい方
- オリジナルグッズの企画・デザインやイベントの実施など、広報にかかわるなにかをしてみたい方



登録いただいた方には、
ノベルティグッズをプレゼントします。

ちょっとでも気になった方は、まずはぜひメールでご連絡ください。

総務課総務・広報グループ koho@j.hokkyodai.ac.jp



WEBアンケートにご協力ください

北海道教育大学学園情報誌「HUE-LANDSCAPE」をよりよくするために、アンケートのご協力をお願いします。
読者の皆様からいただいた励ましのお声や貴重なご意見は、より充実した誌面作りのために活用させていただきます。
なお、アンケートにご協力いただいた先着100名様に、「オリジナルステーションナリーセット」を進呈いたします。

アンケート掲載先

<https://www.hokkyodai.ac.jp/intro/public/gakuenjohoshi/>



感想・意見・要望・情報・アイデア募集中! イラスト・写真・その他の投稿も歓迎

- ▶○○の活躍を取り上げてほしい、○○が面白そうなので取材してみたい? など、本誌についてのご意見・ご要望などをお寄せください。可能な限り掲載させていただきますので、下記の編集局のメールアドレスまでお知らせください。
- ▶本誌の各ページを飾る「らくがきイラスト」も、随時募集しています。各キャンパスの編集局員の先生方に渡してください。その他、写真やイラストなどの画像、書・絵画・彫刻・工芸などの作品を写した写真の投稿も歓迎します。画像ファイル(拡張子がjpg)を添付したメールを、編集局のメールアドレスまでどうぞ。

ご意見・ご感想・ご要望を編集局にお寄せください!
landscape@s.hokkyodai.ac.jp

保健管理センター発

企業のパワーハラスメント対策の 法制化について

昨年度はセクハラについて取り上げましたが、今年度はパワーハラスメント(パワハラ)について取り上げます。
企業がパワハラ対策をすることが法律で義務づけられたからです。

パワハラ対策の法制化

2019年5月29日に法律(労働施策総合推進法の改正案)が制定されて、事業主は「パワハラ相談体制の整備」「発生後の再発防止策」などを義務づけられることになりました。業務上の指導との線引きが難しいとの企業側の意向を受けて、今回はパワハラ行為自体への罰則規定は見送られました。それでも法制化は職場環境改善への一歩と言えるでしょう。大企業では2020年4月から、中小企業では2022年4月から義務化される見通しです。

パワハラとは

厚生労働省によるパワーハラスメントの定義は以下の通りです。「同じ職場で働く者に対して、職務上の地位や人間関係などの職場内での優位性を背景に、業務の適正な範囲を超えて、精神的・身体的苦痛を与える又は職場環境を悪化させる行為」。

ここで大切なポイントは、「職場内での優位性」というのは「上司から部下へ」のみを指しているわけではないということです。ケースによっては「同僚から同僚へ」「部下から上司

へ」というパワハラも起こり得ると想定されています。また、もう一つのポイントは「業務の適正な範囲を超えて」という箇所です。つまり、適正な範囲を超えない指導や注意などはパワハラには該当しないということを意味しています。たとえば、業務中の不必要な私語を注意されたからといって、それをパワハラと主張するのは難しいでしょう。

パワハラの具体例

もっともどこまでを「適正な範囲」と見なすかは個人によってかなり異なる可能性があります。そこで厚生労働省は以下のような具体例を挙げています。

- ①身体的な攻撃: 叩く、殴る、蹴るなどの暴行を受ける。丸めたポスターで頭を叩く。
- ②精神的な攻撃: 同僚の目の前で叱責される。他の職員を宛先に含めてメールで罵倒される。必要以上に長時間にわたり、繰り返し執拗に叱る。
- ③人間関係からの切り離し: 1人だけ別室に席を移される。強制的に自宅待機を命じられる。送別会に出席させない。
- ④過大な要求: 新人で仕事のやり方もわ

からないのに、他の人の仕事まで押しつけられて、同僚は、みんな先に帰ってしまった。

- ⑤過小な要求: 運転手なのに営業所の草むしりだけを命じられる。事務職なのに倉庫業務だけを命じられる。
- ⑥個の侵害: 交際相手について執拗に問われる。妻に対する悪口を言われる。

これらを基準に自分が受けているのはパワハラに該当するのかを考えてみると良いでしょう。

職場のパワハラをなくすために

近年、パワハラ相談は増加傾向にあり、パワハラのためにうつ病などの精神疾患にかかる人も増加してきています。職場のように権力関係のあるところにはどうしてもハラスメントが生じがちです。学生の皆さんも将来仕事に就いた時にパワハラの被害者にも加害者にもならないように、パワハラについて今のうちによく理解しておくことをお勧めします。

(保健管理センター・カウンセラー・三上 謙一)

